

# 寮生活何もかもが嫌になった

いま No.652  
子どもたちは  
お坊さん高校生 ⑥

昨年7月、高野山に「大変化」が起きた。町中心部に初めて24時間営業のコンビニエンスストアができたのだ。あっという間に高野山高校の生徒たちの

人気スポットとなった。「飲み物も食べ物もやっぱり、品ぞろえがいい」。寄宿舎に暮らす片山雅矢君(18)は心から喜ぶ。東京都杉並区出身で、高野山に来るまで田舎とは縁がなかった。親戚に高野山高校出身の住職がいたこともあり、進学を決めた。でも、本音では迷い続けていた。

最終的に高野山に来る気持ちになったのは、中3の3月に起きた東日本大震災だった。震度5の揺れに見舞われた東京。家のテレビで東北の町が津波に襲われる様子を見た。一晩中眠れなかった。ポランティアをしたいとNPOに電話したが、中学生には無理だと断られた。「だったら、被災地のために祈ろう、そのために高野山に行くんだ」。そう自分を納得させていた。

それでも、髪をそるのはすこく嫌だった。友達から「坊主頭の写真送って」と言われたが、送らなかった。寄宿舎は、2年生までは2人



追悼法会を儀式を執り行う片山雅矢君(右端) 和歌山県高野町  
1部屋。2段ベッドに眠り、掃除、洗濯も自分でしなくてはならない。後片付けは苦手だし、食べ物に好き嫌いも多い。教室でも1人でいることが多かった。無料通話アプリの「LINE E(ライン)」ができるまでは、月の電話代が数万円になったこともあった。

高2の正月は、親戚の寺を手伝うため、岡山県で過ごした。新学期が始まる前に、岡山から高野山に直接向かうつもりだった。岡山駅でふと、「このまま新幹線に乗っていけば、東京へ戻れるんだ」と思った。翌冬の、何もかもが嫌になっ

た。思い切って東京行き切符を買った。その夜、実家に戻った。そのまま体調を崩してしまっただけで、欠席が続いていくうち、一段と高野山に行きつらくなってきた。「どうせ自分がいなくても、誰も困らないんだ」。そう思い始めた矢先、ラインでメッセージが届いた。(三橋麻子)

# 「早くかえってきいや」級友の縁

いま No.653  
子どもたちは  
お坊さん高校生 ⑦

「早くかえってきいや」昨年1月、無断で東京都杉並区の実家へ帰ってしまった片山雅矢君(18)をつなぎとめたのは、スマホに届いた女子生徒か

らのメッセージだった。それまで、高野山高校の6人の同級生とは、うまくいっていないと思っていた。メッセージをやりとりするうち、「自分も必要とされている」と感じられるようになってきた。勇気を出して高野山へ向かった。意外と普通に学校生活に戻ることができた。ただ、照れくさくて、メッセージのお礼は言えないままだ。

卒業式を翌月に控えた今年1月21日。布教の実習で、高野山を訪れた約30人の参拝客の前に立ち、弘法大師の言葉を紹介した。「菩薩の用心は皆、慈悲を以て本とし、利他を以て先とす」菩薩は人と接するとき、まず相手のことを考えろという意味だ。「自分中心の考えをやめれば幸せが訪れる」と続けた。何度も練り直した原稿だ。



卒業後は東京に戻り、仏教系の大学へ進む。被災地でポランティアをしてみたい。もちろん

正直言って、将来、お坊さんになるか、まだ決めていない。「いつか高野山を懐かしく思う日が来るのかな」片山君をつなぎとめたメッセージの送り主は、松本鮎さん(18)。大阪市出身だ。「クラスメートは一生一度の縁」。そう思っている。でも、高野山に来るまでは、自分も同世代の子が苦手だった。小さいころから、人の悪い部分に目がいき、決めつけてしま

追悼法会でお経を読む松本鮎さん 和歌山県高野町  
入学直後に寺でついたあだ名は「能面」。あまりに無表情だったからだ。(三橋麻子)